【別添２】

34	広島大学附属小学校	26～29

平成２９年度研究開発自己評価書

Ⅰ　研究開発の内容

１　教育課程

（１）　編成した教育課程の特徴

中央教育審議会答申（2016）においては，「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し，連携・協働しながら，新しい時代に求められる資質・能力を子供達に育む「社会に開かれた教育課程」の実現をめざし，学習指導要領等が，学校，家庭，地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう，各学校に置いて教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すこと等」が求められた。このことは，社会情勢に応じてグローバルに活躍できる人材を学校教育において育成することの必要性を示している。そこで，本研究は，グローバル化に対応した人材育成という目的に基づき，「自ら学び　自他のレベルを向上させる　リーダーとして活躍できる子ども」をめざす子ども像として設定し，このめざす子ども像を実現するために，「グローバル化の視点を取り入れたカリキュラム」について研究実践を進めてきた。

その大きな特徴は，次の三つである。

・小学校全学年を通じての英語科の実践

・既存の教科教育の指導の充実

各教科（国語科，社会科，算数科，理科，音楽科，造形科，体育科，英語科）における「グローバル化の視点を取り入れたカリキュラム」についての研究実践

小学校第１学年からの「社会科」「理科」の実践

・小学校第１学年からの総合的な学習の時間において「多文化・多言語交流学習」の実践

教育課程の編成に当たっては，３つの資質・能力の育成に取り組んできた（表１）。

（表１）３つの資質・能力について

①　生きるために必要となる知識・技能【知識・技能】
②　文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力【思考力・表現力】
③　アイデンティティをもち，異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度【共生を創る態度】

表１の３つの資質・能力は，各教科固有で育成する資質・能力と教科の枠をこえて育成する資質・能力を設定した。

各教科固有で育成する資質・能力については子どもたちに表１の３つの資質・能力を効果的に育成するために，表２で示したような各教科固有で育成する資質・能力を整理した（表２）。子どもたちが各教科において深い学びを達成し，各教科固有の３つの資質･能力を身に付けていくことをめざす。

教科の枠をこえて育成する資質・能力については，表３で示したように「問題解決力」「論理的思考力」「アイデンティティ」等といった要素で構成した（表３）。例えば，グローバル人材育成のために，低学年段階では「特徴に気付く」問題解決力や，「理由をもって考える」論理的思考力等を育成する。「特徴に気付く」問題解決力は，理科では生物観察により特徴に気付かせること，社会科では社会事象との出会いによりに特徴に気付かせることなど，教科の学習内容を通して育成する。これらの要素が身に付いていれば，低学年段階でのグローバルリーダーとして必要な資質・能力が育まれている状態であると言える。

グローバル化社会を生き抜く子どもの育成を実現するために，各教科で作成したカリキュラムを見直し，３つの資質・能力育成を意識して構成した。

（表２）　各教科固有の資質・能力

資質･能力 ＼ 教科	生きるために必要となる知識・技能	文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力	アイデンティティをもち，異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度
国語科	読書に関する知識・技能	読書を通した思考力・判断力・表現力	主体的・積極的に読書に取り組み，読書を通して，情緒を育て，様々な人のなかに参入する態度
社会科	グローバル化社会を解釈するために必要な知識・技能	グローバルな変化に対する主体的な思考力・判断力・表現力	グローバル化社会を構成する一員として，グローバル化社会に積極的にかかわる意欲や態度
算数科	数量や図形についての知識・技能	数学的な思考力・表現力	協働的に算数を創る態度
理　科	科学的知識・技能	科学的な思考力・表現力	自然の事物・現象にかかわる態度
音楽科	表現と鑑賞の基礎的・基本的な知識・技能	知覚・感受したことをもとに音楽表現を工夫する力，創作する力，評価する力	音楽の感じ方や音楽に対する思いや意図に共感する態度
造形科	材料や用具，技法についての知識・技能	造形活動を通した表現力・作品を鑑賞する力	造形活動を通して，他者を思いやりながら積極的にかかわる態度
体育科	運動についての知識・技能	運動についての思考力・判断力	共に学び合い，共に文化を共有し合う仲間として他者を認め合い，結び合う態度
英語科	言語や文化に関する知識・技能	英語を活用した思考力・表現力	英語を使ってコミュニケーションを図る態度

（表３）　教科の枠をこえて育てる資質・能力

資質・能力	資質・能力の要素		低学年 自ら学び　自他の相違を認め つながりをつくることができる子ども	中学年 自ら学び　自他の相違を生かし 協働することができる子ども	高学年 自ら学び　自他のレベルを向上させる リーダーとして活躍できる子ども
生きるために必要となる知識・技能【知識・技能】	各教科における基礎的・基本的な知識・技能		・各教科固有の知識・技能の獲得		
文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力【思考・表現】	問題解決力	課題の設定	・疑問をもつ	・相違に気付く	・事象から捉える
		情報の収集	・選ぶ	・集める	・探す
		整理・分析	・特徴に気付く	・結びつけて考える	・背景を考える
		まとめ・表現	・感想・意見をもつ	・考えをまとめる，整理する	・考えを吟味する
	論理的思考力		・理由をもって考える	・根拠をもって考える	・複数の根拠をもって考える
	批判的思考力		・受け入れる，認める	・判断する	・代替案を考える
	反省的思考力		・自分の立場で考える	・相手の立場で考える	・全体的な視野で考える
アイデンティティをもち，異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度【共生を創る態度】	アイデンティティ		・好きなことが言える ・家族や友達を見つめる	・よいところが言える ・地域や国を見つめる	・変容が言える ・国や世界を見つめる
	他者との協働		・自分のことを伝えながら，活動する	・相手のことを尊重しながら，活動する	・友好な関係をつくりながら，活動する
	新たな価値観の創造		・人とのかかわりを大切にする意識をもつ	・自然や平和への畏敬をもつ ・多面的な考え方をもつ	・グローバルな志向をもつ

編成したカリキュラムの特徴について，大きく４点述べる。

①小学校全学年を通じての英語科の実践

本校では英語を教科として第１学年から導入し，英語を通じて，ことばや文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，「聞くこと」「読むこと」「やりとり」「発表」「書くこと」などの英語コミュニケーション能力の基盤を養うことを目標とした。この目標を達成するために，以下の三つの視点から単元を構成し，カリキュラムを作成した。

・Communication：Core（英語の音声やリズムを習得し，英語コミュニケーションの基礎を学んだり，基本表現を使って言語活動を行いながら英語表現を増やして使ったりする単元）

・Communication：CLIL（他教科・領域での既習内容や学校行事について英語を通して学ぶことによって思考力・表現力を育成する単元）

・Communication：Active（e ラーニングシステムや帯活動において，子どもが各自でパフォーマン課題を設定し，それに向かって個人で技能を高める単元）

②既存の教科教育の指導の充実：小学校第１学年からの社会科の実践

グローバル化により社会構造は，ますます多様化，複雑化している。そのような中では，低学年のうちから自分のことだけではなく社会にも目を向けさせることが必要になってきているのではない

か。１・２年生にも，自分以外の存在が見えるようにしていくのが低学年社会科の役割だと考える。低学年社会科を実施することで，１・２年生なりの社会的な見方や考え方をつけていき，社会形成力の育成を目指したい。

また，グローバル化社会だからこそ，家庭・学校・地域といった，学習対象の枠を外し，低学年のうちからグローバルな視野で「家庭→学校→地域→日本→世界」の一方向だけではなく，「世界→日本→地域→学校→家庭」といった双方向で学習を展開する必要があると考える。以上，社会科では，グローバル化社会に対応するためにより一層社会形成力を育成させるという理由から，第１・２学年の社会科を実施した。

③既存の教科教育の指導の充実：小学校第１学年からの理科の実践

グローバル化社会の中で，自然事象について，地球規模で考えなければならない問題が生じている。そのような中では，科学的リテラシーの育成をより一層充実させるために，直覚的に自然の事物・現象をとらえることができる低学年期において，科学遊び文化や栽培・飼育といった体験活動の中で，積極的に観察経験を積ませ，観察力の低下を防ぎ，自然の事物・現象についてスパイラルなカリキュラムの中で取り扱うことが必要なのではないか。発達の特性に即した１・２年生なりの科学的な見方や考え方として，自然の事物・現象について相違点と共通点をとらえる観察活動をしていくことが低学年理科の役割であり，そのことがより一層科学的リテラシーを育成することにつながると考える。

また，グローバル化社会だからこそ，科学が人類共通の文化であり，自然を説明するための一つの様式であるという世界の潮流に見合った科学観の育成を目指す学習を展開する必要があると考え，「科学の本質」に関する理解を進めていくためにも，第１・２学年から理科を実施した。

④小学校第１学年からの「多文化・多言語交流学習」の実践

グローバル化に対応した人材とは，グローバルな「人とのかかわり合い」ができる人である。グローバルな「人とのかかわり合い」ができるかどうかを評価するための活動として，多文化・多言語交流学習を以下のように設定し，実施した（表４）。

（表４）　多文化・多言語交流学習

学年	交流の系統性	交流対象	めざす子ども像（評価規準）
高学年	グローバル 共に伸びる	外国の方	留学生と一緒に活動することを通して，互いの立場を尊重して自分や相手の思いを伝え合い，気付いたことをもとに，新たな考えをもつことができる子ども。
中学年	他を認める	海辺や山間部で生活する人	海辺や山間部で生活する人たちと一緒に活動することを通して，物おじせず実際に触れたり，相手の話を聴いたり，自分が知っていることを話したりし，生活に生かそうとすることができる子ども。
低学年	自分を知る ローカル	身の回りや地域の人	身の回りや地域の人たちと一緒に活動することを通して，進んで自分のことを伝えたり，進んで相手のことをたずねたりして，互いに楽しく過ごすことができる子ども。

（２）　教育課程の内容は適切であったか

めざす子ども像の実現にむけて，３つの資質・能力は子どもたちにどのように身に付いてきているのか。子どもたちの姿から検証を行い，カリキュラムの改善や修正を図っていくための評価に取り組んだ（表５）。重点を置いて取り組んだのは，表５の①と④である。①では各教科で育成してきた資質・能力が統合され，総合的に発揮できたかどうかを評価した。④の評価では，各教科のカリキュラムで育てたい３つの資質・能力が身に付いたかどうかを評価した。

（表５）評価の取組

総合学習	①　多文化・多言語交流学習で，総合的に行う評価
各教科	②　授業ごとに行う評価 ③　単元ごとに行う評価 ④　前期，後期ごとに行う評価

また，編成にあたっては，広島大学と連携し指導・助言をいただくのはもちろん，第１回運営指導委員会（６月），第２回運営指導委員会（10 月）においても専門的見地から指導・助言をいただき，改善を図ってきた。

なお，校内授業研究会において抽出児童（３名）の発話・行動記録をとったり，ワークシートの記述から判断したりして，目標の達成状況を協議することで，カリキュラムの検証を行った。

校内授業研究会

(ｱ) 検証の方法

・本時の目標をもとに，学習活動における子どもの具体的な姿として，「十分満足」「概ね満足」「努力を要する」という３段階で評価基準を設定した。

・「十分満足」「概ね満足」「努力を要する」状況の子どもを１名ずつ抽出し，子どものつぶやき，発言，行動，ワークシートの記述について観察し記録した。

・抽出児童の目標の達成状況から，授業および単元の検証を行った。

(ｲ) 実施

月	日	曜	教科・授業者・助言者
6	29	木	理　科授業研究：授業者　教諭　加藤祐治　助言者　広島大学　磯﨑哲夫先生
7	11	火	音楽科授業研究：授業者　教諭　梅比良麻子　助言者　広島大学　三村真弓先生
10	26	木	英語科授業研究：授業者　教諭　西原美幸　助言者　広島大学　深澤清治先生
	30	月	造形科授業研究：授業者　教諭　八橋有加　助言者　広島大学　三根和浪先生
11	2	木	体育科授業研究：授業者　教諭　中西紘士　助言者　広島大学　大後戸一樹先生
	7	火	算数科授業研究：授業者　教諭　新田智子　助言者　広島大学　小山正孝先生
	16	木	国語科授業研究：授業者　教諭　山本陽子　助言者　広島大学　間瀬茂夫先生
	30	木	社会科授業研究：授業者　教諭　服部　太　助言者　広島大学　草原和博先生

（３）　授業時間等についての工夫

小学校全学年における英語科，社会科，理科を実施するために，第１・２学年の生活科を廃止するとともに，国語科，音楽科，造形科，体育科，総合的な学習の時間の配当時間を削減した。

そして，英語科は，第１～６学年とも週２単位時間の時数を配分し，全学年で１単位時間ずつ，別日に割り振った。

第１・２学年の社会科，理科はそれぞれ週２単位時間の時間を配分し，社会科は１単位時間ずつ別日に割り振り，理科は２単位時間を同一日に割り振った。

２　指導方法・教材等

（１）　実施した指導方法等の特徴

本年度は，８教科（国語科・社会科・算数科・理科・音楽科・造形科・体育科・英語科）において，各教科固有で育成する資質・能力だけではなく，本校が設定した「教科の枠をこえた資質・能力」の育成に焦点を当てた授業研究を行った。

①小学校全学年を通じての英語科の実践

第３学年英語科 Welcome to Japan!の事例

単元	Welcome to Japan！		
問題解決力	整理・分析	・結び付けて考える	日本や外国で使用されている地図記号やピクトグラムそのものやそれらに関する自分が知り得た限られた情報を整理・分類し，英語で表現することができる。
	まとめ・表現	・考えをまとめる 整理する	
中心となる活動	・英語を聞いたり読んだりして，情報をカテゴリーごとに分類する。 ・知り得た情報をもとに，英語でオリジナルマークを提案し，伝え合う。		

(ｱ) 指導目標

○　日本や外国で使用されている地図記号やピクトグラム，それらに関する自分が知り得た限られた情報，オリジナルマークについて話された内容を聞き取り，簡単な語句を使って感想や疑問を伝えることが出来る。（知識・技能）

○　簡単な語句を使って，日本や外国で使用されている地図記号やピクトグラムに関する自分が知り得た限られた情報，自分達が考えたオリジナルマークについて伝えることができる。（思考力・表現力）

(ｲ) 指導計画（全６時間）

第１時　絵本の読み聞かせを聞き，町にある建物や店の名前を英語で思い出す。

第２時　日本で使用されている地図記号やピクトグラムについて英語で知る。
第３時　外国で使用されている地図記号やピクトグラムについて英語で知る。
第４時　日本と外国で使用されている地図記号やピクトグラムの相違点について気づいたことを教師や友だちと英語でやりとりしたり，分類したりする活動を通して，自分達で考えた外国の方に向けたオリジナルマークを考えることができる。
第５時　オリジナルマークを英語で提案・紹介する。
第６時　日本の地図記号やピクトグラム，自分達で考えたオリジナルマークを紹介した簡易パンフレットを作成する。

②既存の教科教育の指導の充実：社会科

第４学年社会科「広島の柑橘栽培史」の事例

単元	広島の柑橘栽培史	
論理的思考力	・根拠をもとに考える	社会事象に関する具体的な事実を用いて考えることができる。
中心となる活動	・みかんよりはっさくを広めた利点は何か，資料を用いて考える。	

(ｱ) 指導目標

○　広島における柑橘栽培は，はっさく栽培のように地域間競争を避け，特産地化を目指したり，レモン栽培のように，安心・安全をアピールし，海外産レモンとの違いを明確にした生産を試みたりしたことを知ることができる。（知識・技能）

○　広島における柑橘栽培が，みかんの地域間競争やグローバル化による価格の競り負けといった社会背景があったことをとらえ，その都度，はっさくやレモンのような他の柑橘類を栽培して地域間競争をのりきったり，安心・安全をアピールしてグローバル化による価格の競り負けをのりきったりしていったことを，具体的な事実をもとに考えることができる。（思考力・表現力）

○　広島における柑橘栽培の変遷には，柑橘類が適正な価格で人々に売れるかどうかといった経済的な要因が大きくかかわっている。このことについて，因島や広島，海外といった社会背景から，多面的な見方や考え方をもつことができる。（共生を創る態度）

(ｲ) 指導計画（全９時間）

第１次　広島におけるみかん栽培・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第２次　広島におけるはっさく栽培・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第３次　広島におけるレモン栽培・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

③既存の教科教育の指導の充実：理科

第６学年理科「植物の成長と水」の事例

単元	「植物の成長と水」		
問題解決力	整理・分析	・背景を考える	結果と考察の違いについて理解し，結果を科学的な証拠として，推論の妥当性について科学的な考えをもとに検討し，考察すること。
	まとめ・表現	・考えを吟味する	
中心となる活動	・科学的な証拠をもとに多面的に推論する。 ・推論の妥当性について，科学的な考えをもとに検討する。		

(ｱ) 指導目標

○　植物の根・茎・葉には，水や養分の通り道があり，根から吸い上げられた水は主に葉から蒸発していることや植物の葉に日光が当たると，でんぷんができることを理解することができる。（知識・技能）

○　日光が当たった葉でつくられたでんぷんを，植物は自分の成長に使ったりいもや種子に蓄えたりしていることや植物に入った水は水の通り道を通して，葉で蒸散されるといった仕組みについて，根拠をもとにより妥当な考えを作り出すことができる。（思考力・表現力）

○　植物体内の水と養分の通り道に興味をもち，進んでそのようすを推論し，生命を維持し育つためのつくりやはたらきについて，意欲的に追究しようとする。（共生を創る態度）

(ｲ) 指導計画（全１０時間）

第１次　植物と日光の関係を調べよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

第２次　植物の中の水の通り道を調べよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

④小学校第１学年からの「多文化・多言語交流学習」の実践

第５学年「交流学習」の事例

フィリピン大学教育関係者の方々約 30 名を招聘し，多文化・多言語交流学習を設定した。互いの立場を尊重して，外国の方々と交流して，他言語を話す他者とかかわり，新たな考えをもつことを期待した。

(ｱ) 交流学習のねらい

外国の方と自国の伝統遊びや食文化・食事マナーについてお互いに紹介し，一緒に活動することを通して，互いの立場を尊重し，自分や相手の思いを伝え合い，気づいたことをもとに新たな考えをもつことができる。

(ｲ) 交流活動の内容

〇事前学習

・フィリピンの方々に紹介するために，日本の伝統遊びや日本の食文化・食事マナーについて文章にまとめ，英語で表現するための必要な語彙や表現を学習する。

・日本の伝統遊びや日本の食文化・食事マナーを伝える際に，必要なものを準備する。

〇交流学習本番

・グループに分かれて，英語による自己紹介やミニトークでお互いの国について話し合う。

・日本とフィリピンの伝統遊びをお互いに紹介し合い，一緒に活動する。

・ともに食事を取り，お互いの国の食文化・食事マナーについて英語で伝え合う。

〇事後学習

・交流活動を通して気づいたことを班で話し合い，振り返りシートにまとめる。

（２）　指導方法等は適切であったか

①小学校全学年を通じての英語科の実践

第３学年英語科「Welcome to Japan!」の事例

(ｱ) 本時の目標

日本や外国で使用されている地図記号やピクトグラムを用いて，英語でやりとりしたり分類したりする活動を通して，自分達で考えたオリジナルマークを提案し，伝え合うことができる。（思考力・表現力）

(ｲ) 評価規準

地図記号やピクトグラムが表すものについて，英語でやりとりしたり分類したりする活動を通して英語の言語形式に慣れ，自分達で考えたマークを提案し，伝え合うことができる。

(ｳ) 授業の実際

本実践を行った際には，授業後毎回行う Reflection Time において，学習内容に言及した気づきだけではなく，「何のために（目的）」「だれに向かって（相手）」「どんな場面で（状況）」を考えた英語使用が小学校中学年段階でも可能であることがわかった。

> ・わからない単語もあったけれど，その場でおしえてもらってすぐに使うことができました。
> ・これから，東京オリンピックに向けて，日本には外国の人が増えると思うので，あったらべんりだろうなと思うようなマークを考えてしょうかいしました。（授業後の Reflection Sheet より子どもの感想）

(ｴ) 成果(〇)と課題(●)

〇　子ども一人一人が自分の思いのこもったシンボルマークについて提案し，異なる内容を伝え合うために，英語を使ってコミュニケーションを図ることができた。

〇　英語学習において，扱う内容まで簡単にしてしまうのではなく，多少難しい単語を使うことになったとしてもその場で使いながら身に付けていくことで，学習テーマに関する知識や技能がより習得され，思考・判断・表現と双方向で資質・能力が高められる。

●　子どもの表現意欲が高く，その場で教師に尋ねながら，自分で考えたシンボルマークを紹介した。３年生段階における認知発達レベルと言語発達レベルにはギャップがあり，自分が思考して伝えたい内容と実際に自分達が持っている表現のツールとしての語彙や表現に差がある。母語を

どこまで許容し，差をいかに埋めていくかがカリキュラム編成とその実践に問われている。また，めざすものと評価するものは異なるため，適切な評価規準と評価場面を設定する必要がある。

②既存の教科教育の指導の充実：社会科

第４学年社会科「広島の柑橘栽培史」の事例

(ｱ) 本時の目標

高く売ることができたみかんよりはっさくを広めようとした意図について，資料をもとに具体的な事実を用いて考えることができる。(思考力・表現力)

(ｲ) 評価規準

はっさくを広めようとした意図を資料をもとに具体的な事実を用いて考えることができる。

(ｳ) 授業の実際

「因島でみかんよりはっさくを広めようとしたのはなぜか」という課題を設定し，追究していった。みかんがはっさくよりも高い値段であったことを理解しつつ，それでもはっさくを広めようとしたことについて，何かしらの理由があるのではと考えた。「はっさくを広めたかったから」「はっさくにより因島の価値があがる」といった多種多様な予想が出てきた。これらの予想を検証するため，資料をもとにさらに考えを深めていった。当時の都道府県別みかん生産量の割合から，「みかんで有名な愛媛があるから，今さらみかんを育てたとしても因島は有名になれない」といった資料を根拠にして発言する子どももいた。

(ｴ) 成果(○)と課題(●)

○「因島でみかんよりはっさくを広めようとしたのはなぜか」といった利益追求の点から矛盾を問う学習課題は，子どもたちが意欲的に考えようとするきっかけとなった。

○「みかんやはっさくが，当時，どれだけ食べられていたのかのデータはないのか」という質問が，子どもたちから出てきた。このことから，子どもたちが根拠をもとに，論理的に考えようとしていることがうかがえた。

●「みかんやはっさくが，当時，どれだけ食べられていたのかのデータはないのか」といった子どもたちの要求にこたえるような十分な資料を用意していなかった。子どもたちが論理的思考力を発揮するには，子どもたちの思考を想定し，もっとたくさんの資料を用意する必要がある。このことを踏まえ，資質・能力を育成する社会科カリキュラムを改善していきたい。

③既存の教科教育の指導の充実：理科

第６学年理科「植物の成長と水」の事例

(ｱ) 本時の目標

葉まで運ばれた水の行方を調べ，葉まで運ばれた水が空気中に出されることについて，結果をもとに考察することができる。（思考力・表現力）

(ｲ) 評価規準

葉まで運ばれた水の行方を調べ，葉まで運ばれた水が空気中に出されることについて，結果をもとに考察することができる。

(ｳ) 授業の実際

本時では，「結果を整理すること」「結果をもとに考察すること」この２つの活動を主な活動とした。結果を整理する活動では，植物をおおった袋の中に見られる変化について，できる限り多くの情報を児童に挙げさせ，結果の整理については，本時の問題の解決につながる結果を中心にし，新たな発見につながる結果と分けて捉えることができるように板書した。結果の整理を行う際に，自己の考えを加えたり，結果について自分の予想をもとに客観的に見ることができていないといったりした課題がこれまで見られたが，本時までの学習の積み重ねもあり，ありのままの様子を結果として整理することができていた。

次に，結果をもとに考察する活動では，まず個人で考察し，次に班で話し合ったことをもとに黒板に整理し，最後に各班毎の発表に対して意見を言い，質問をすることで，考察に対する妥当性の検討を行わせた。各班の考察は，本時の問題を解決するために行っているということが意識できており，結果を根拠とすることもできていた。話し合いを通して，結果にもとづいているものとそう

でない考察を整理することもできていた。

(ｴ) 成果(○)と課題(●)

○　考察において実験結果をもとに推論し，結果と考察の違いを意識できる子どもを育むことができたと考える。それは，本時の中で，結果と考察について，結果は自分の目で見たこと（ありのままの様子）であり，考察は結果をもとにして自分で考えたこと（推論）であることを子どもが発言することができ，子どもなりに違いを理解し表現することができていることが分かったためである。

●　本時の考察では，結果をもとに想像力を働かせて推論を行うことができていたかという面では，問題設定に課題が残る。今後は，子どもが結果をもとに推論を活発に交流できるような問題の設定が必要である。

④小学校第１学年からの「多文化・多言語交流学習」の実践

第５学年「交流学習」の事例

(ｱ)「交流学習」の実際

フィリピンの方々との交流学習では，こま，めんこ，折り紙，あやとり等，英語を使って日本の伝統遊びを紹介したり共に活動したりすることを通して，友好的な関係を構築しながら活動していた。昼食時には，「おぼんの上にどのように主食やおかず，汁物を配置するのかが決まっており，当たり前の日本のご飯には色々な工夫があると思った」との気付きを得たり「日本の食材について味や調理方法をうまく伝えることができた」等，自国と他国の相違点についてとらえ直したりしていた子どもがいた。また，「これまで勉強してきた英語がとても役に立った。さっと出てこない単語や表現もあったけれど，フィリピンの方が簡単な言い方で言い直してくれたり，実物を見せながら話したりすることで，乗り切れることがわかった。これからも英語を使って色々なことをやってみたい。」と，フィリピンの方々とのかかわりから新たな気付きや意欲を得ている子どももいた。

(ｲ) 成果(○)と課題(●)

○　フィリピンから日本に来られたばかりという相手の立場を尊重して自分や相手の思いを伝え合い，交流を通して自国の良さや言葉の大切さに気付くなど新たな考えをもつことができた。

○　交流学習を通して，コミュニケーションツールとしての英語の有用性に気付くとともに，自国と世界を見つめ，初めて出会う他者と友好的な関係を築き上げようとすることができた。

●　交流学習を子どもにとっては統合的な学びを発揮する場面の一つとして，教員にとっては育てたい資質・能力が育っているかどうかを見取る場面の一つとして設定することは重要な意味をもつ。交流学習においては各教科で学んだ知識及び技能や思考・表現がいかに発揮されるかということを期待したがこれまでの全ての学びが表出する活動を考案することは難しかった。

Ⅱ　実施の効果

１　児童・生徒への効果

昨年度より表５で示したように各教科で「④前期，後期ごとに行う評価」に取り組んできた。半年間の学びを経て各教科で３つの資質・能力が身に付いたかどうかを評価した。評価の方法の一つとしてパフォーマンス評価を行っており，パフォーマンス評価から児童への効果について述べる。

（１）　小学校全学年を通じての英語科の実践

①第６学年英語科前期の評価問題の事例

【パフォーマンス評価（H29．９）】
あなたたちは研修旅行で京都・大阪へ行きます。そこで出会った初対面の外国の方に，英語で２分間のインタビューをしてください。（あなたたちから適切な質問をしたり自分のことを述べたりして会話の主導権を取ります。）

ペアでの会話活動を行うこととして，一人が研修旅行生役，もう一人が外国人役をつとめる。研修旅行生役は，外国人役をやってくれる相手に対して，最初の質問のみ先に知らせることができる。ただし，切り替えし質問に対しては，予想してアドリブで返答する。外国人役は，うまく質問に答え，さらに会話が続くようにする。

思考力・表現力の評価として，目的・場面・相手を明確にして即興的な英語でのやりとりを見取っ

た。話し手が，聞き手の理解を促したり反応を求めたりする表現だけでなく，つなぎ言葉を用いて話を続けたり，聞き手が反応したりといったようなコミュニケーション・ストラテジーを用いることができていた。また，児童には必ず自分が話した内容を振り返らせることで，言えなかったことや知らなかった表現を確認させ，次への課題を自分で設定させた。

②e ラーニングを用いた指導の効果

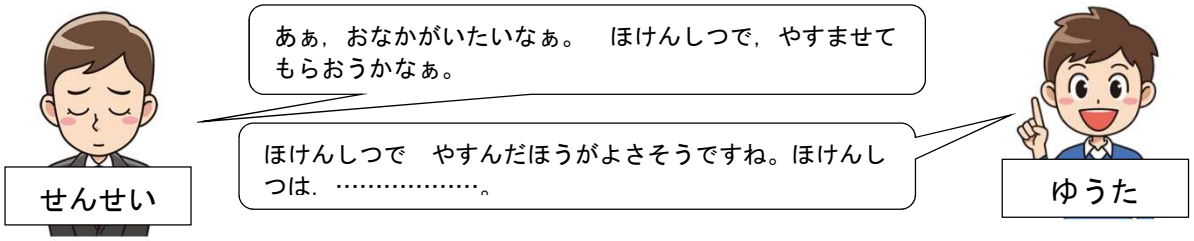
週一回程度，短時間学習で，通常の二コマの授業内容と連動させ帯学習で行った。既習内容を補強したり継続して何度もチャレンジしたりして課題解決できる点が，児童の学びにおいて有効である。

（２）　既存の教科教育の指導の充実：社会

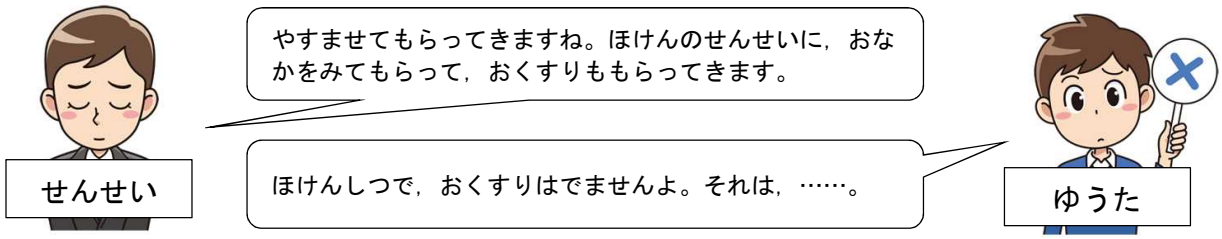
第１学年社会科前期の評価の事例

【パフォーマンス評価（H29. 9）】

９がつから，きょういくじっしゅうのせんせいが　いらっしゃいます。



ア　ゆうたくんになって，きょうしつからほけんしつへのいきかたを，せんせいにおしえましょう。



イ　なぜほけんしつでくすりはでないのでしょうか。ゆうたくんになって，せんせいにおしえましょう。

思考力・表現力の評価としては，「十分満足できると判断される児童」には，「保健の先生は，病院の先生じゃないから注射はできません。できるのは，けがの治療や，休ませることです」と保健室の先生の役割を，病院の先生と区別して理解することができた。自分なりに理由を明確にして，考えをしっかりと説明をすることができた。満足と判断できる児童は，66%（35 名）であった。第 1 学年の前期ということもあり，まだ書いて説明ということには，難しさが生じる。

（３）　既存の教科教育の指導の充実：理科

第１学年理科前期の評価の事例

【パフォーマンス評価（H29. 9）】

フラワーフェスティバルに，ともだちのゆうじくんといっしょにいきました。そこで，２しゅるいのはなのたねをもらいましたが，どちらもどんなはなのたねなのかわかりません。いえにかえって，ほんでしらべてみると，そのうちのひとつは「ひまわり」のたねだということがわかりました。そこで，さっそく，でんわでひろしくんに，おしえてあげることにしました。

ぼく「ゆうじくん，２しゅるいのたねのうち，ひとつはひまわりだよ。」
ゆうじくん「どっちがひまわりのたねかな。わからないよ。」
「ひまわりのたねは，　　。」

ア　ゆうじくんがわかるように，ひまわりのたねのとくちょうを，できるだけくわしくせつめいしましょう。
イ　ゆうじくんは，さっそく，ひまわりのたねをうえました。でも，うえただけでは，めがでてきません。どうしたら，めがでてくるのでしょうか。ゆうじくんにおしえてあげましょう。

思考力・表現力の評価としては，色，かたち，大きさなどの観察の視点のうち，2 点以上の視点を明らかにして，説明することができていた児童が，89%（63 名中 56 名）いた。ひまわり以外の種と著しく異なる特徴を挙げることができている児童がほとんどだった。

（４）　小学校第１学年からの「多文化・多言語交流学習」の実施

第５学年「交流学習」評価の事例

【実施後アンケート（H29．９】
・相手の立場に立って話を聴くことができたか。
・自分の思いを伝えることができたか。
・他者とかかわり，新たな考えをもつことができたか。

「相手の立場に立って話を聴くことができたか」，「自分の思いを伝えることができたか」といった問いに対して肯定的にとらえている子どもは60名（95%），否定的にとらえている子どもは４名（６%）であった。肯定的にとらえている子どもは，「言葉の大切さに気付けた。」「言いたいことを伝えるために，英語を生かすことができた。」のように，言語がコミュニケーションを図るための有効な手段であることに気付いたり，「給食を一緒に食べながら，色々な日本料理の名前と食事のマナーについて話したり日本語を教えてあげたりした。この交流をきっかけに，日本の伝統的な遊びや食べ物について改めで学ぶことができて良かった。」のように，自国の良さについて再認識したりすることができていた。否定的にとらえていた子どもは，「緊張して自分からなかなか話しかけられなかった。もっと話す自信をつけたい。」と自分の課題を見つけている子もいた。ほとんどの子どもが，自分や世界について気付きを得たり，初めて会ったフィリピンの方々と友好的な関係を構築し，新しい考え方に出会ったりするなど，積極的に異なる文化や価値観をもつ他者とかかわり合うことができたと言える。

２　教師への効果

校内授業研究は全教員が参加できるように年間計画できちんと時間を確保した。カリキュラムを子どもの学びの視点からとらえ，「教科の枠をこえた資質・能力の育成」等，共通のテーマをもって授業に取り組んだり，子どもの学びの姿から授業討議をしたりしたことが，全教員が共通の視点で指導を考える良い機会となった。授業参観者の授業及び単元，カリキュラムに関する意見・感想の中で，資質・能力の見取り，指導方法の改善等について以下のような気づきが得られた。

・前時と比べ，発言者が増え，その内容も結果を科学的な証拠として検討する「考察」になっていました。また「考察」が理解できていない児童も，他の児童の発言を聴きながら，おぼろげながらも「結果」と「考察」の違いがわかりつつある段階であると思います。（資質・能力の見取り）
・最初から万全に準備された発問や支援の手立てのみを用いるのではなく，Trial and Error で常に見直しや修正を図りながら，子ども達に目的や場面や状況に応じて外国語を使用させることを心がけたいと思います。今後とも，問題解決のプロセスを丁寧にたどる授業を大切にしていきたいと考えます。（指導方法の改善等）

３　保護者等への効果

保護者を対象に小学校第１学年から実施する社会科と理科について，毎年アンケート調査を実施しており，そこでの自由記述を挙げる。

【肯定的記述】
・３年生以降の学習の基礎となるテーマを分かりやすく指導していただいている。
・専門的視点で学ぶことにより，子どもの興味や関心が深まっているように感じる。
【否定的記述】
・目に見える特別な変化が見られない。・低学年時よりテスト勉強をすることが気になる。

Ⅲ　研究実施上の問題点と今後の課題

以上の取組をふまえて，現時点で明らかになっている問題点と今後の課題は次の２点である。

○　これまで，パフォーマンス評価やポートフォリオ評価を行ってきた。しかし，子ども達にとって問題がリアルな文脈になっていなかったり，資質・能力をどのように身に付けているか十分に見取れなかったりした。今後も評価の検討を続け，カリキュラムの改善に反映させる必要がある。

○　グローバル人材育成に寄与するカリキュラムを各教科（国語科，社会科，算数科，理科，音楽科，造形科，体育科，英語科）で開発した。このカリキュラムをもとに，実践を行ってきたが，６年間を見通したカリキュラムの成果や課題を得るには十分な期間とは言えない。そこで，本カリキュラムについて，さらにマネジメントをしていく必要がある。